

カナ女の伝説

寝待温泉の近くにある一本の松の木は、見る者に禁じられた恋の背筋が凍る物語を思い出させます。昔々、種子島から来た仏僧が湯向の集落に住んでいました。侍の娘であったカナ女は、本村集落に住んでいました。二人は恋をしており、カナ女は片道三時間近くかかる危険な道を歩いて、たびたびこの僧に会いに行っていました。カナ女の兄はこの恋愛に気付き、家名を汚さないよう、彼女に僧に会うのをやめるようにと警告しました。当時、僧侶は妻をめとることを禁じられていたのです。しかし、兄の忠告にもかかわらず、カナ女は身ごもり、子を産みました。怒った兄は星ヶ峯の溪谷でカナ女を待ち伏せ、陰惨にもそこで彼女の首をはねました。カナ女の死体と子どもは谷底へと落下し、一方、彼女の頭部は髪の毛が一本松の枝に絡まり、木からぶら下がったままの状態でとり残されました。子供は母を求めて泣き続け、以来、山々にこだまする赤子の泣く声が聞こえると言われていました。カナ女の死体も、子供も見つからなかったそうです。

この悲惨な出来事が起こった太陰暦の九月 1 日に、カナ女の子孫たちは毎年、彼女の霊を供養するため、刺身、赤飯、塩、そして白米を供えています。さもないと家族に不幸が降りかかると信じているからです。

現在この場所は深い森になっています。本村から湯向に行くには車でも約 50 分かかり、カナ女が愛する人と共に過ごすために甘受した労苦を証する道のりとなっています。